

わくわく中国文化

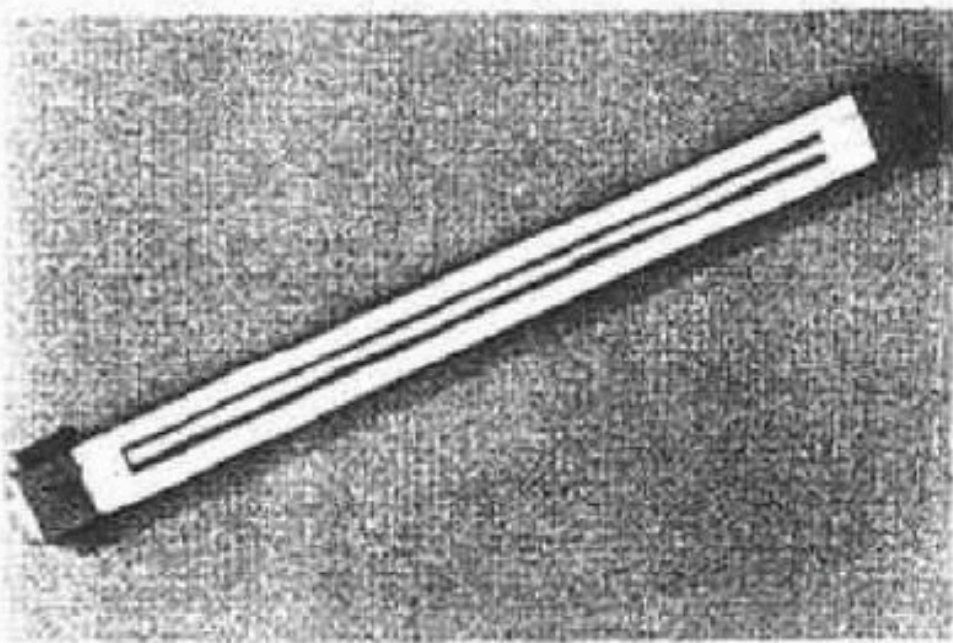


—お箸について—

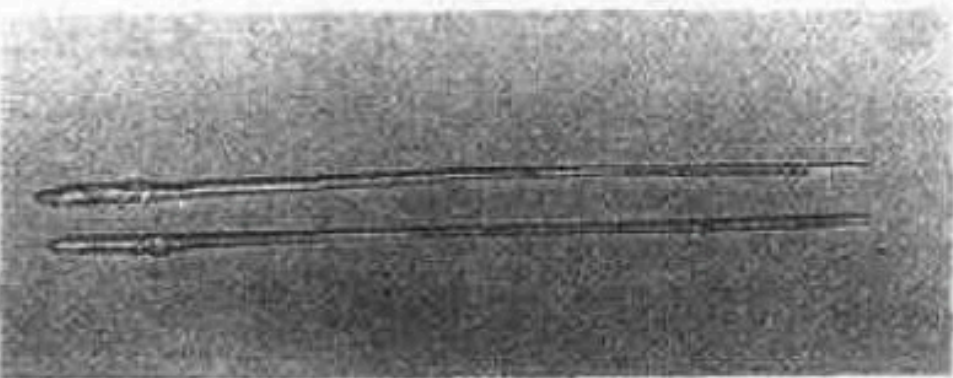
Illustration by KOH_HSL([instagram](#))

皆さん、こんにちは。毎日の食事に欠かせない食器の一つは何でしょうか。ヒントは、欧米よりアジアで、南アジアより東アジアでよく使われるものです。お分かりになりましたか。答えはお箸です。皆さんは、幼い頃に親から箸の使い方を教わったことを覚えていますか。最初は指の間で滑ったり、手から落ちたりして、なかなか上手に持てなかったのではないのでしょうか。たった2本の棒に、先人たちの知恵が宿っています。今回は、中国と日本のお箸について、一緒に見ていきましょう。

箸は古代中国で生まれた伝統的な食器で、中国の食文化の象徴の一つです。現在は東アジアを中心に広く使われており、その歴史も長いとされています。1990年代に発掘された江蘇省高郵市の龍虬莊遺跡からは、今から6600～5500年前の骨製の箸とされるものが大量に出土しており、箸の使用の歴史が新石器時代にまでさかのぼることを示す資料とされています。箸に関する古い記録の一つに、『韓非子・喻老』の「昔、紂が象牙の箸を作った時、箕子は恐れた」という記述があります。約3600年前の殷（商）王朝の最後の王である帝辛（紂王）が象牙の箸を作ったとき、叔父の箕子が恐れたという話です。この史書の記述から、先秦時代にはすでに「箸」という呼び方が存在していたことが分かります。また、先秦の典籍『礼記・曲礼上』には「羹之有菜者用桮、其無菜者不用桮（羹の中に野菜があるものは桮を用い、野菜のないものは用いない）」という記述があり、「桮（きょう）」という呼び方も使われていました。秦漢時代には「箸」という呼び方が一般的になりました。象牙製の箸のほか、竹製や青銅製の箸も出土しています。隋唐時代には、金銀で作られた箸が登場しました。



馬王堆漢墓出土竹箸



四川大邑東漢墓出土銅箸

▲漢の時代の竹製・青銅製の箸



▲中国の考古学的発見で最も早い銀箸（隋の時代）

明の時代には「箸」という呼び方が現れました。明の『菽園雜記』によると、呉の中部地域（現在の江蘇省蘇州市とその周辺）には、船が航行する際に、「住（止まる）」に関わる言葉を忌み嫌う風習がありました。「箸」と「住」は中国語の発音が同じであるため、「箸」を「住」の反対の意味を持つ「快（速い）」に言い換えたと記されています。「快」には、船が滞りなく航行できるようにという願いが込められています。その後、素材の竹を表す竹冠が加わり、「筴」という漢字になりました。しかし、「箸」という言葉が中国語から完全に消えたわけではありません。現在でも、中国東南部の沿海地域（台州、温州、厦門、漳州、泉州、福州、潮州）では、「箸」という呼び方が使われ続けています。



◀「箸」という言葉を使っている地域（赤は使用中）

中国の箸

中国の箸の一つ目の特徴は、先端が丸く、持ち手側が四角柱の形をしていることです。この形には、古代中国の「天円地方（天は丸く、地は四角い）」という宇宙観が反映されていると言われています。



二つ目は、箸の長さに関わる考え方です。中国の箸の長さは七寸六分（25.33cm）とされ、その長さを人間の「七情六欲（様々な感情や欲望）」と結び付ける説明があります。そこには、食事の際に節度を保ち、食べ過ぎを避けるようにという意味が込められていると言われています。

三つ目は、2本で一对となる箸に、太極の陰陽、対立と統一、調和と包摂の理念が込められているとされることです。

四つ目は、箸を持つ際の指の配置にも意味があるとされることです。親指と人差し指を上、薬指と小指を下、中指をその間に置く持ち方は、「天・地・人」という三才を表していると言われています。



日本の箸

7世紀初頭、遣隋使として中国へ派遣された小野妹子らが、箸と匙を使う中国の食文化を持ち帰り、聖徳太子が朝廷の食事作法に取り入れたとされています。その後、箸を使って食事をする習慣は、貴族から庶民へと徐々に広がり、12世紀中頃には庶民の間でも日常的に箸が使われるようになったと言われています。

日本の箸は、中国の箸に比べて短く、先端が細いのが特徴です。先端が細いのは、骨付きの魚を食べる際に、骨と身をより分けやすくするためと言われています。また、日本では器を持ち上げて口を付けて食べることがあり、その際には短い箸の方が使いやすいとされています。

